



特定非営利活動法人 事業継続推進機構

＜受賞記念・特別配布版＞ ・BCAOを支えた～故ナターンリーローデン～

特定非営利活動法人 事業継続推進機構（BCAO）の設立発起人であり、理事としてご活動いただいた Nathan Lee Rhoden 氏が永眠されました。彼の事業継続推進機構での活動だけでなく、日本の危機管理、BCの普及にご尽力いただいた功績をたたえて、特別号としてご紹介します。

【 Nathan Lee Rhoden とは何者? 】



BCAO の設立発起人で、理事を務めていた Nathan Lee Rhoden 氏が、2016 年 10 月 20 日慢性心不全のため、永眠されました（享年 57 歳）。

“Boys, be ambitious!

Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame.

Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be “

「青年よ、大志を抱け！」「金のためまたは利己的栄達の為にでもなく、ましてや人よんで名誉と称する空しきもののためにでもない。知識に対して、正義に対して、かつ国民の向上のために大志を抱け。人と

してまさにかくあらねばならぬ全ての事を達成せんとするために大志を抱け」



ローデンは、このクラーク博士の"Boys be ambitious!"の後の言葉が好きでした。「お金や地位や名声の為ではなく人として人の役に立つことをしよう」ローデンは

それを真に貫き、この言葉の通りに生きた人生でした。

北海道で宣教師の息子として生まれ、日本で育ち、そして多くの皆様に愛されました。大きな体と流暢な日本語で、いつも私たちを包みこみ、彼のいるところはいつも笑いがあり、酒があり、そんな時間が彼は大好きでした。



ローデンは、日本になかった BC の「概念」というより「心」を伝えることに尽力し続けました。

【BCAO での活躍】

2006 年に特定非営利活動法人事業継続推進機構 (BCAO) が設立されましたが、BCP/BCM を日本国内に正しく伝え、推進するために、その発起人の 1 人となりました。また、BCAO の最初の成果となる「標準テキスト」作成に際しては、米国の BC 教育機関である DRI インターナショナルの 10 の要素を取り入れるべきだと熱く語り、誰が何と言おうともこの信念を曲げることはありませんでした。「BC = 防災」という議論に発展しそうなときには、「BC」とは何かを説きました。現在もその精神は、テキストや資格制度に受け継がれています。

BCAO では、日本企業および公的組織

の事業継続管理者および担当者の基礎知識の習得を容易にするため、また、事業継続の実務経験者の専門性を向上させるために、専門資格制度を構築しています。そして、この資格保有者には、知識を高め維持して頂くため継続教育を実施しています。この中で、ローデンは、米国をはじめとする海外の動向や、BC の歴史、新たに生まれてくる用語、例えば「BCMS」、「レジリエンス」等が海外で実際にどのように使われているのか、定義等を伝える役割を担い、毎年講義を行っていました。



継続教育の講義の様子

BCAO の設立時、海外の BC の推進団体と友好関係を進める趣旨で、米国 DRI インターナショナルと英国 BCI の代表者を理事として迎え入れる調整もローデンが担当しました。日本で新たに立ち上がる団体に理事として参画して頂くことができたのは、ローデンの説得と彼の人徳なしにはあり得ませんでした。

何も無いところから、BCAO を立ち上げるためには、華やかな部分だけでなく、技術面やロジスチック面の作業も多くあり、その一つひとつにローデンは関わって

いました。実は、BCAO のロゴのデザインは、ローデンが仕上げたものです。

特定非営利活動法人

事業継続推進機構



BCAO のロゴは、「BC」を正しく推進するため、推進「Advancement」の「A」を「BC」の中に崩してデザインし、様々な関係者が共に推進していく団体という趣旨で「Organization」の「O」を「BC」の全体を包むというコンセプトです。

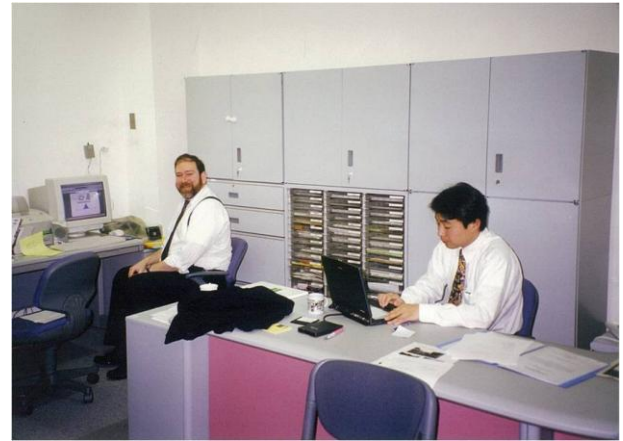
また、BCAO のドメイン「bcao.org」の取得や設立当初のホームページのデザイン、構成から立ち上げまでも、ローデンが手掛けました。

【細坪事務局長が語る

ローデンとの出会いと彼の功績】

阪神・淡路大震災の後、FEMA をはじめとする米国の危機管理の専門家の方々から、日本には危機管理が足りないと言われていました。その言葉を聞いて、米国に学びに行くため、単に通訳者でなく、日本の文化を理解した外国人はいないかと関係者に依頼して探したところ、知人の紹介でローデンと出会いました。知り合った当初は、毎日のように朝まで酒を飲みながら、日本の危機管理の将来について語りあいました。我々の目指す活動は、営利を追求するのではなく、「日本を強くすることである」という結論から、ローデンと共に米国に視察に参りました。その時、ロサンゼルス市のバイセップ (BICEPP) という、企業とロサンゼルス市の自治体とが一緒になって自分達の地域について議論をしている非営利団体に出会いました。ぜひこ

の取組みを日本でやりたいと考え、各省庁をまわり、日本で非営利団体が設立できないかと汗をかきました。



出会ったころのローデン

しかし、残念なことに、当時の日本の仕組では、様々な条件が整わないと財団法人、社団法人を設立することができませんでした。今でこそ簡単に、一般財団法人、一般社団法人が設立できる時代になりましたが・・・。

我々が、任意団体ではなく、正式な非営利団体を立ち上げたいと努力している中で、「特定非営利活動推進法」が制定され、喜び勇んで担当窓口の門をたたきました。しかし、12 の特定の活動の中に、「危機管理」、「BC」という項目がなかったため、窓口の最初の回答は、設立は難しいというものでした。

その後、何度も当時の経済企画庁に足を運び、「なぜ日本では危機管理、BC に関する非営利団体ができないのか」と尋ね、こちらの意向を伝え続け、このローデンの熱意が担当者にも伝わり、12 の特定の活動の中の「社会教育の推進を図る活動」、「地域安全活動」、「災害救援活動」の一環として危機管理や BC の普及を推進していくという形で、認可をいただきました。

これが現在の特定非営利活動法人危機管理対策機構（CMPO）です。

同機構は、1997年6月から任意団体として活動を開始し、翌1998年12月に特定非営利活動法人としての承認申請を行い、1999年4月19日、経済企画庁（現在の内閣府認証）の第一期生として、日本国で初めて、危機管理やBCの普及を行う特定非営利活動法人の認証を受けました。

それから9年後、BCAOの設立となるわけですが、この時のローデンの熱意がなければ、BCの推進団体として、BCAOが特定非営利活動法人の認証を受けることは困難だったかもしれません。

【ローデンが伝えた数々の トレーニングや演習】

何とんでも、日本におけるBCの普及では、「Disaster Recovery Institute International」(DRI インターナショナル)というBCの専門家育成の教育機関を日本に導入したことが重要でした。1999年に日本で初めて米国からDRI インターナショナルの講師を招きBCの講座を開催しました。その後、準備期間を経て2010年6月2日にDRI japanを設立、DRIのコースの普及に努めました。このコースを学ばれた方々が、BCの専門家、実務者として活動されています。

「Disaster Recovery Journal」(DRJ)は、1987年にセントルイスにおいて創刊された災害復旧に関する業界No.1の専門雑誌で、ビジネス継続と災害復旧を理解する上で貴重な専門誌です。そのコンファレンスには世界各地から災害対応やBCPに関わる専門家が集まります。創設者は、DRI インターナショナルを立ち上げた方で、米国においてDR、BCの業界を作っ

た方です。このDRJを日本で紹介するため、DR、BCの業界として日本で初めて開催されたディザスターリカバリーカンファレンスにてDRJを紹介させて頂きました。



また、日本にDRJを紹介するだけでなく、米国のDRJのコンファレンスでも発表の機会にも恵まれました。ローデンが通訳をしてくれていますが、ただ単に日本語を英語に置き換える、または英語を日本語に置き換えるのではなく、相手にしっかりと伝わるように、その背景をも通訳をしながら伝えてくれたものでした。この時は、東日本大震災の発表でしたので「お互い様」の精神で連携したという講演の後にスタンディングオベーションが起きました。



ローデン自身も日本の危機管理、BCの取り組みについてニューヨークのシンポジウムで講演しました。



も、トレーナーを務め、普及活動に努めました。



ローデンは、日本の危機管理に携わる方々に、「CERT」「スタートトリアージ」「ICS」「EOC」「ERP」「BCP」「危機広報」「エクササイズ(演習)」等々を述べ伝え、米国との橋渡しに尽力していました。

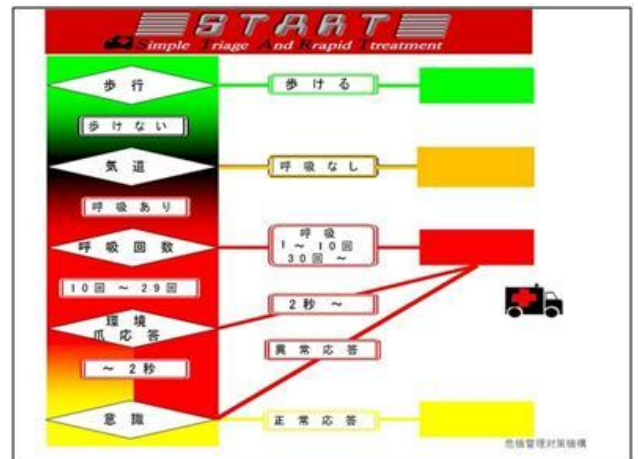


CERT (Community Emergency Response Team) Training

CERTとは、市民と企業に災害対策における自分達の責務をよく理解させ、自分達自身や自分達の家族、自分達の近隣の人々を安全に助ける能力を高める緊急対応トレーニングプログラムのことです。

命にかかわることですので、私達は米国からDHSの公認演習トレーナーをお招きし、みっちり学んだうえで、各方面にて展開をさせて頂きました。ほんとに多くの方々に学んで頂いています。ローデン自身

CERT Trainingにはいくつかのメニューがあります。



「スタートトリアージ」



この写真は、独立行政法人国際協力機構（JICA）の事業として、アジア諸国の方々に災害現場において搬送者の優先順位をつける「スタート・トリアージ」の方法の講義とトレーニングを実施した時の様子です。役者さんにけが人のメイクを施し、模擬の災害現場を作り、多数のけが人発生という状況でのトレーニングで、ローデンはトレーナーを務めています。

モックディザスター訓練

今では日本国内でも多くの方がモックディザスター訓練の手法を取り入れ、様々な訓練をして下さっていますが、ローデンが米国から取り入れてきた手法です。どうやってこの訓練を普及して行くかを考え、米国でやっている通りにするのではなく、日本流にアレンジし、数えきれないほどの回数を実施させて頂きました。

D-PAC プロジェクト

D-PAC プロジェクトは、コミュニティに共存する企業及び地域の人々が、「来たときは来たとき」という受身の考え方ではなく、互い知恵を出し協力し合って、「来たときにどう対処するのか自らで考える」という前向きな考え方のものです。行政や経営者が、他人に任せるのではなく、災害に対して前向きかつ積極的に取り組み、災害に強いコミュニティや企業を目指していくプロジェクトです。米国の「プロジェクトインパクト」を参考に日本で展開するに当たって、このロゴマークを使用しても良いという承諾を取り付けたのもローデンの功績です。



日本で初めての「D-PAC プロジェクト」

は、米国から講師をお招きして西東京市（旧田無市）で実施しました。2000年8月～2001年2月、旧田無市・東京都・国土庁・東京消防庁のご後援を頂き、旧田無市をモデルコミュニティとし、事業主体は、同市を中心にコミュニティの情報を発信している「FM西東京」、東京の大災害に備えてネットワークを構築している「東京災害ボランティアネットワーク」、及び危機意識の向上を目指している「特定非営利活動法人危機管理対策機構」でした。広く市民や企業・自治体に参加していただき、事業を展開しました。



2001年からは千代田区と連携し、企業同士が集まる「災害に強い企業づくり」を行いました。



危機広報トレーニングの様子

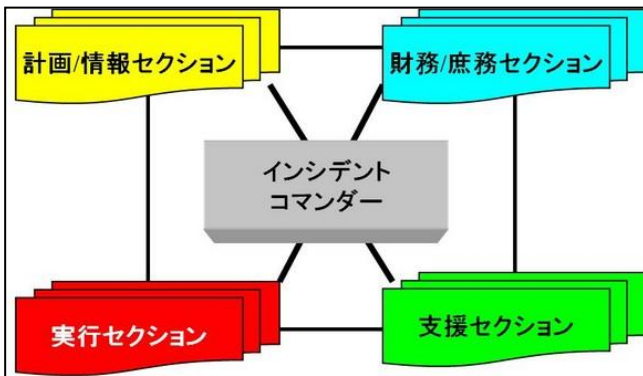
「危機広報」 トレーニング

現在のように危機広報トレーニングが実施されていなかった頃、米国の危機広報の講師を務める専門家を日本に招致し、講義と危機広報のトレーニングを実施しました。

その時の講師の言葉に「サメと一緒に泳ぎましょう」という言葉がありました。そのままではなかなか伝わらないと思いますが、ローデンの絶妙な通訳で、参加者にはご理解いただけたことと思います。

説明の一部を紹介します

「ICS」: ICS で重要なのは縦割りの組織図ではなく機能的なルールである。

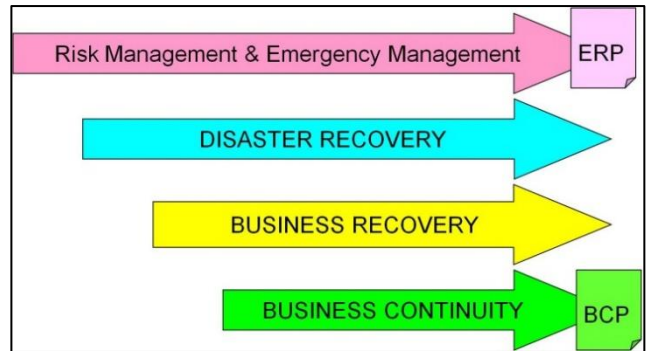


「EOC」: EOC は、日本の災害対策本部とは似ているけど違う。

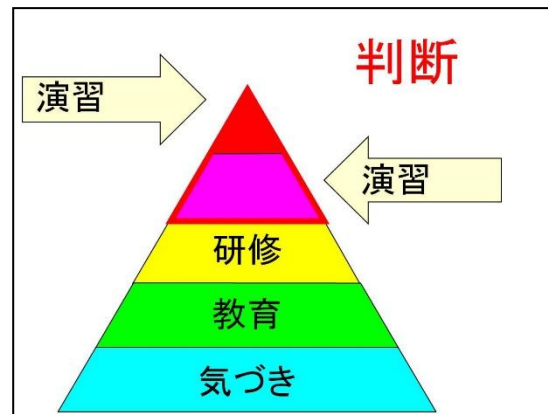


「ERP」「BCP」: 人命視点の「ERP」と

ビジネス視点の「BCP」似ているけど違う。



「エクササイズ (演習)」: 想定外を含めて究極の判断が伴う場の設定で、想定内のドリルとは異なる。



米国の災害対応、危機広報などの専門家を招致し、数々のセミナーや専門講座を開催しました。その都度、今後日本にとって必要なこと、今、伝えなくてはならないことを考え、米国の専門家に連絡し、交渉しました。ローデンはここでも大活躍しました。彼の熱意と英語のコミュニケーション能力で、多くの方々が来て下さいましたが、ここでも、米国の考え方をそのまま日本に伝えるのではなく、日本の文化を常に念頭に置き、どのように伝えていくのが良いかを考え、そして、講師の方々にはまるで拉致でもされたかのように、セミナーや専門講座の本番まで、寝させてもらえず資料を作成するのです。

もちろん、終わった後には、たつぷりと日本の文化に触れて頂き、たつぷりと美味しいものを召し上がって頂きました。



ICS の開発に携わったボーデン氏（右）

【数々の海外視察、調査】

米国をはじめ、英国やイスラエルなど、危機管理の先進国から当時の最先端の様々な情報を得ました。自らも「CIA の面接も受けたことがある」と言っていました。確かに、ローデンの情報収集、整理、分析能力はずば抜けていましたが、今となっては本当だったのかわかりません。

様々なことを海外から学び、危機管理、セキュリティの視点でホワイトハウスまで行くことができたのは彼のおかげだと思います。多分、日本人として誰も行けないところに行き、情報を得ることができました。

10 数年前、日本政府の業務継続の調査で米国の政府関係者から聞き取り調査をしている中で、「これ以上米国の政府の内容を知ってしまったら、米国から出られないよ」と言われるところまで調査しました。このように、ローデンの調査は、表面的な内容だけでなく、米国での BC、業務継続の真髓を調査してくれました。



911 で実際に使用されたホットサイト



FEMA での聞き取り調査の様子



トヨタ USA の EOC の視察の様子



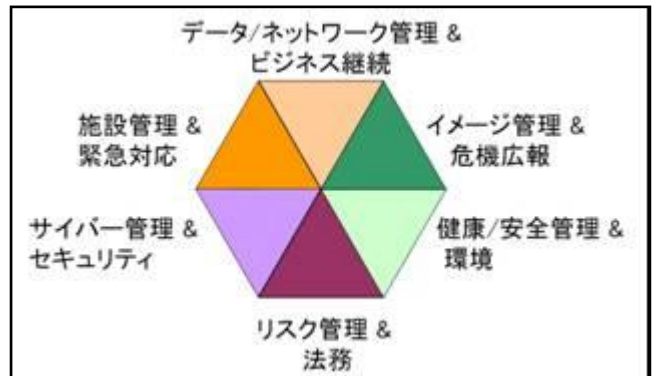
FEMA の EOC

一方で、米国から学ぶだけでなく、国内で様々な事業を展開しました。FEMA を視察した際、現地 EOC が移動型のバスであったので、移動用の車に事務所機能を持たせることができないだろうか、都内において移動事務所を活用した演習などもしていました。



【危機管理研究会】

各企業の危機管理に携わる方達とともに、危機管理研究会を開催して、熱い議論を交わしてきました。ローデンも講師を務め、危機管理対策機構が提唱している危機管理の 6 つの要素について講演を致しました。今から思えば、何物にも代えがたい貴重な時間であったと思います。



【ローデン新潟へ】

その後、さまざまな災害に見舞われる中で BCP が役に立たないと言われるようになり、「今までは訓練は実施してきたが、演習はやっていなかった。自分たちの組織を強くなるための演習が必要なんだ。」ということで、一般財団法人危機管理教育&演習センターを立ち上げました。

新潟県南魚沼市に事務所を設けたのですが、雪深いところですので、最初、ローデンは「こんな寒いところ行きとうなかった。(大河ドラマ天地人のパクリ?)」などと言っていましたが、住めば都で「もうここから離れたくない」というほどでした。



ローデンが過ごした新潟の事務所兼宿舍

一般財団法人危機管理教育&演習センターの精神には、米百俵の精神、すなわち「百俵の米も、食べばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」という、まさに食べるよりも先に教育が必要だというポリシーが息づいています。



新潟に事務所を設けてから、毎年、新潟県と共に首都圏危機管理セミナーを実施しています。ローデンは、文化とことばに対する造詣の深さと、米国での経験を生かし、パネルディスカッションのパネリストとして毎年活躍していました。

また、米どころ新潟での、BCの普及、推進においては、新潟大学の方々や、新潟県下の米に関する事業を展開しておられる方々と共にシリコンバレーにもじって「ライスバレー」というクラスターとして海外に打って出ようというコンセプトを打ち出しました。ローデンは、その新潟の取り組みを各国の様々な情報を提供してくれていました。



年に1回行われる「フードメッセ in にいがた」は2007年から始まった日本海側最大の食の総合見本市です。このフードメッセにも参加させて頂き、ローデンはセミナー講師を務めたり、ブースに戻って「ライスバレー」の紹介をしたりと大活躍でした。

【東日本大震災】

2011年（平成23年）3月11日に発生した東日本大震災の後、米国から線量計を取り寄せ、いち早く現地調査を実施しました。



福島で線量を調査している様子

東日本大震災を受けて、「お互い様BC連携」を推進していくためにBCを推進している団体が集まり調印を行いました。



また、東日本大震災で被災された方々を元気づけるために、被災地の食材と新潟の米麺を使った「R麺グランプリ」を開催しました。新潟・東北予選では、ローデンも新潟の食材を使って腕を振るい、被災地の方々に元気を届けました。新潟・東北予選を突破した合計 11 組が新宿の本選でグランプリを競い、ローデンは外国人から見た審査ということで審査員をしてくれました。

この時にグランプリを獲得した商品を、東京都内の企業の社員食堂のメニューに取り入れていただきました。

R麺グランプリ以外にも、復興支援のアイデア会議を開き、震災後初めて被災地の食材を首都圏で販売する被災地復興支援物産展なども開催しました。被災地にもたびたび訪問し、ローデンは、その様子を世界へ発信する仕事も行っていました。

【ローデンの人柄】

ローデンは初めて会った人とも、親戚以上、兄弟のような親しい温かい関係を築いていく人でした。「日本の国を愛し、日本人を愛し、そして自分も日本人の文化風習に溶け込んで自分も一緒に苦楽を共にしたい。こういう意思のあらわれの生涯であったなと感じました。」これはローデンに一度も会ったことのない牧師様の葬儀の際のお言葉です。

また、ローデンは、家族をとっても大切にする人でした。毎日、米国の家族に電話をして近況を報告していました。

平吾さんの家族も、皆、ローデンの事が大好きでした。日本のおせち料理を毎年 1 月 1 日に届くように送り、ローデンからは、お母様の誕生日に、おせちを送ったお重一杯に色々なお菓子を詰めて送り返してくれる。このような愛の交流がありました。

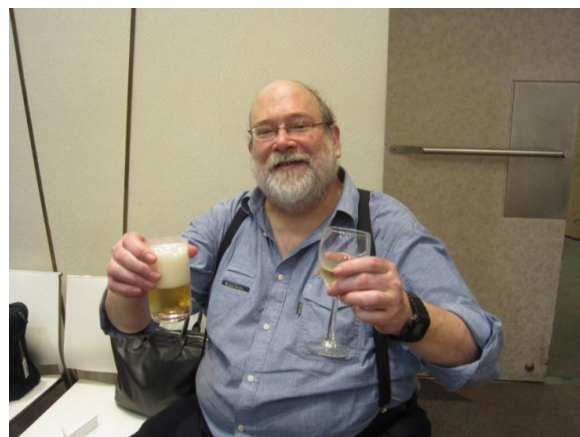


毎年、ローデンに送られていたおせち料理



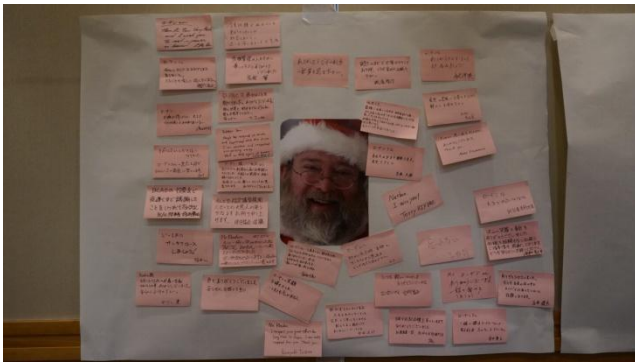
ローデンからお返しのお菓子の詰合せ

ローデンは、お酒が大好きで、議論をすることが大好きで、にぎやかなことが大好きでした。事業継続推進機構の総会後の親睦会の様子です。



【皆さんに愛されたローデン】

国内外の多くの方から、ローデンとの思い出と暖かいメッセージをいただきました。



葬儀の参列者からいただいたメッセージ

「ローデンさんについて、まっさきに頭に浮かぶのは、彼がBCAOの名づけ親ということです。また、飲みながらの印象が強いですが、日米組織の違いについて、よく議論したのを覚えています。これからも、ローデンさんの遺志を継いで、グローバルな活動団体として、その存在感を示していけるよう頑張りたいと思います」

堀越 繁明（特定非営利活動法人事業継続推進機構 理事長）

「ローデンさんには、新たな災害発生等きっかけに日本でのBCMの考え方や教え方を工夫しようとするとき、海外でも理解されますか？とよくご意見を聞きました。時にはBCAOの方法が、米国でも考えられていない良いアイデアだと言ってもらえて、自信をつけました。思い出すシーンは、ローデンさんが面白い発言をし、細坪さん鋭く突っ込み、平吾さんが困ったように笑っているシーンです。」

丸谷 浩明（特定非営利活動法人事業継続推進機構 副理事長）

「ローデンさんと最初に会ったのは、セミナーで登壇した瞬間、早口の英語でなにやらまくし立て、それからおもむろに、流ちょうな日本語で、本日は日本の皆さんが多いので日本語にしますと講演を始めたのがすごく印象に残っています。それから10年近く経ちました。

その後、CERT訓練では、アメリカのFIMAの方々を呼んで本場の訓練をしたのも印象的でした。」

荒井 富美雄（特定非営利活動法人事業継続推進機構 監事）

「彼はとても親切で寛大で、私は彼を良き友人だと思っていました。私は、大変好きな思い出として、日本への訪問をずっと覚えています。」

ステイーブ・メリッシュ（BCI 元代表）

「彼は、明るくて面白い男でした。彼が恋しく思われます。」

アラン・バーマン（DRI インターナショナル元代表）

「彼は、とてもユニークな人でした。私は彼との会話をとても楽しんでいました。」

クロエ（DRI インターナショナル現代表）

「彼は、非常に特別な、また、知己に富んだ方法で、我々の心に触れてくれたので、我々も彼をよく知ることができました。私たちがミッションや焦点から外れた場合には、彼は、常に私たちを正しい道に導き、教えてくれました。常に、決してぶれず、思いやりにあふれた方法でそうしてくれました。」

バーニー・ペラント（バーニーペラントアソシエイツ）

「彼の大きな笑い声をいつも思いだします。彼と会話したり、緊急事態や危機への対策について語り合い、時間を過ごしたりするのは、いつも楽しいものでした。」
クリス・ライト（BICEPP 会長）

「ローデンさんは、新潟に溶け込んでいただき、BCの普及にもご尽力いただいただけにとても残念です。」
小林啓輔（新潟県庁）

「私は、新潟での彼しか知りませんでしたので、彼の幅広い活躍がわかりました。本当に素晴らしいやつでした。彼のご両親の夢を引き継いで、まさに宣教師の人生でした。」
門脇 基二（新潟大学）

ローデンは日本の文化を深く愛していました。日本人が大好きで、危機管理に集ってくださる多くの方々を「変人クラブ」と呼んで、とってもお気に入りでした。米国では、変人という言葉は褒め言葉なんです。英語ではかっこよく「SAT」チームとローデンが名づけてくれました。



危機管理スペシャルウェアネスチーム

以下は、危機管理スペシャルウェアネスチームメンバーから

「Nathan, I always miss you! - Terry」
木船 賢治（埼玉県防災士会 会長）

「指揮官教育のあり方を検討した折に OODA-loop を紹介していただき、危機管理の基本を指導して頂きました大変有難うございました。」
鈴木 正弘（元東京消防庁）

「ローデンさんには、新潟での演習や DRI の講習時に何かと気さくにアドバイスをして頂き、アメリカも日本も平時からの教育の違いはあるけれども、安全に対する考え方は同じである部分をより認識させて頂きました。多くの事を伝えて残して頂き有難うございます。」
天野 康輔

「幾つかの講演会の意見交換の席でローデンさんの意見が鋭く新鮮であったことを今でも強く思い出されます。」
矢作 征三

「彼の人生は私の知る限りでも多彩なものでした。自由なものでした。躓きながらも努力を重ねて、他人の力になろうとする利他の心の持ち主でした。」
白尾 誠一

「ローデンさん明るく元気な姿、個性ある語り口での持論の展開、また、お酒を飲んでいる姿、わたしの車に大きな体を押し込むように乗る姿など、元気な姿が鮮明に浮かんでいきます。それだけ個性的で親しみやすく、皆さんから愛された方だったとあらためて思っています。今後の BCP 推進活動においても、大きな損失となってしまいました。しかし、空から、見守り、協力して、メッセージをくれることと思います。」
渡辺 英男

ローデンは様々なことを私たちに伝えてくれました。彼の独特の視点で、私たちとは違った視点をたくさん伝えてくれました。小手先のツールでなく概念をきちんと伝え、新しい概念から気づかせてくれました。

「日本を強くすることである」というローデンの志は、今後も事業継続推進機構として引き継ぎ続けていきたいと思えます。



BCAO アワード 2016 受賞

■ 賞：BC 推進特別賞

■ 受賞者：故 ナタン・リー・ローデン 氏

(Crisis Management & Organizational Resilience Planning)

(特定非営利活動法人事業継続推進機構 理事)

■ 選考にあたり重視させていただいた点：

米国で習得した BC や危機管理の深い知見をもとに、日本が BCP、BCM を導入する際、日本にはなかったこれら概念の正しい理解の普及に尽力した。また、日本の専門家とともに NPO 法人事業継続推進機構を設立し、長く理事として活動を牽引した。BC に関する訓練の指導では、日本で初めてモックディザスターや地方自治体での大規模なロールプレイング演習を実施し、EOC、危機広報トレーニング、CERT (スタートトリアージ) トレーニングなどを実施した。また、政府の依頼による米国政府の BC 調査等も行い、知見を広めた。



BCAO ニュースレター 第 25 号

発行日：2017 年 07 月 20 日

発行：特定非営利活動法人事業継続推進機構

<http://www.bcao.org/>